

# オックスフォード大学英語教員サマーセミナー (2011年) 参加レポート —大学英語教育の再考察—

河 本 房 子\*

[要旨] 2011年夏に開催された英国オックスフォード大学主催の英語教員向けサマーセミナー (Oxford University English Language Teachers' Summer Seminar) に参加した。2週間に亘り各専門分野研究者からのレクチャーを受けワークショップに参加しながら、世界各国の英語教育者との意見交換を行った。本稿では大学英語教員にとっての外国語としての英語を再認識すると共に教育現場に実践できる最新のスキル獲得、そして、文化多様性を含んだ環境での交流の機会となったセミナー内容をレポートし考察する。

## 1. はじめに

大学英語教員として授業の準備から評価まで、アウトプットの多さを実感する中で、以下の目標と期待を持って本セミナーに参加した。

- (1) 授業へ実践応用するための最新知識、スキルの獲得
- (2) 多国籍教員との交流を通じた意見の交換、国際理解の促進

本 2011 年サマーセミナーは、以下の目的意識を持った教員を対象としている。

- who are in search of ways of improving their English proficiency
- who want to keep up to date with developments in the English language and in ELT
- who want to think about developing materials for use alongside their current course books
- who want to update their knowledge and their resources for teaching about Britain
- who are interested or involved in training ELT teachers
- who want to reflect on and develop their practice

---

\* 非常勤講師／英語コミュニケーション

最新の英語教育に触れ、話し合う機会であり、教科書についての発展と展開という英語教員としての実践に、大半の教員にとって第二言語である英語への探究が加味される。そして開催地、英国についての理解という点では、私自身はロンドンで10年以上の居住経験がある為に基礎理解はあったが、歴史あるオックスフォードの街で開催されるセミナーに参加する事で吸収できる文化的な要素についても期待を抱いた。以下にセミナー内容について述べる。

## 2. セミナー概要

### (1) 開催地

サマーセミナーはオックスフォード大学が母体となっている Department of Continuing Education が企画、運営した。実際のセミナーは大学の中心部にある Exeter College が開催場所となった。朝のレクチャーは Sakarchewan Room において、その後のワークショップはカレッジ内全体に分散した。このカレッジは1314年創設され、古さを競うオックスフォード大学のカレッジの中で4番目に古いカレッジであり、数々の著名な卒業生を輩出している。正門をくぐると前庭の芝生の対面には William Morris の名を冠した Morris Room があり、作品が保存されている他、カーテンや椅子座面にも Morris のテキスタイル生地が使用されている。この部屋もワークショップで日々使用された。また、Phillip Pullman の小説、His Dark Material の舞台となった Jordan College は Exeter College に基づいて書かれているので、読み進むとカレッジ内の情景と重なる。

### (2) 参加者

募集要項のウェブサイトには、“As Participants come from all over the world, the programme is also an exercise in community building and international understanding.”とあった。実際の参加者は以下の通りである (Table 1)。

(Table1)

| country   | number of participants |
|-----------|------------------------|
| Brasil    | 6                      |
| Turkey    | 6                      |
| Slovakia  | 4                      |
| Spain     | 5                      |
| Japan     | 4                      |
| Argentine | 3                      |
| China     | 3                      |
| Italy     | 3                      |
| Chile     | 2                      |
| Ecuador   | 2                      |
| Peru      | 2                      |

|              |    |
|--------------|----|
| Columbia     | 1  |
| Germany      | 1  |
| Holland      | 1  |
| Hungary      | 1  |
| Korea        | 1  |
| Pakistan     | 1  |
| Poland       | 1  |
| Switzerland  | 1  |
| Taiwan       | 1  |
| U.S.A        | 1  |
| UK           | 1  |
| 22 countries | 54 |

2011年のサマーセミナーはTable 1の通り、22か国から54名の教員が参加した。地域はアフリカを除く各大陸からであったが、特に南アメリカからの参加者が多数を占めた。この参加者の文化多様性はセミナーを非常に興味深いものにした。教員の文化圏が違えば当然の事ながら対象となる学習者も変わる。その各自の経験をシェアするのも文化認識を高める良い機会であった。申し込み対象者は、小学校から大学、また大人まで全ての年齢レベルの対象の英語教員となっていたが、実際は高校からそれ以上の年齢を学習者とする参加者が多かった。

### （3）スケジュール

2011年7月31日より8月13日のセミナー会期であったが、まず初日の7月31日はオリエンテーションの後、Fellows' Gardenにおいて英国らしいWelcome Drinkから始まった。翌日からのスケジュールは以下の通りである。

|               |           |
|---------------|-----------|
| 09:15 - 10:45 | Lecture   |
| 10:45 - 11:15 | Coffee    |
| 11:15 - 12:45 | Workshops |
| 12:45 - 13:45 | Lunch     |
| 14:00 - 15:30 | Workshops |

その他に夕方から夜にかけては文化的な側面を持ったレクチャー、ツアーなどの自由参加形式プログラムが準備され、リラックスした環境での交流の場となった。また最終日は修了証授与式がカレッジ長の住居内にあるRector's Gardenで行われた後、ダイニングホールでの全員のフォーマルディナーで終了した。

### （4）アカデミックチーム

セミナーを運営しワークショップを司るアカデミックチームは以下の通りである。

Charles Boyle: Programme Director, author

Adrian Underhill: Principal Tutor, author

Hanna Kryszewska: Trainer, author

Jon Hird : Trainer, author

Edmund Dudley : Trainer

### 3. レクチャー

朝に行われたレクチャー 8 つのうち、2 つを紹介する。

#### (1) The Story of Your Teaching and Learning by Adrian Underhill

ストーリーを語りコミュニケーション能力を高めるプラクティスが紹介された。最初にトピックの提示をする。それに基づき自らのストーリーをパートナーであるリスナーに語る。トピックとしては、経験、或は、理想などのリアルストーリーを語る。その際、スピーカーはリスナーのバックグラウンドにも配慮する事で言語の選び方、声のトーン、速度、強弱など言語以外の分野で nonverbal な側面にまで配慮し、Underhill が言うところの、“from one heart to another heart” のコミュニケーションを試みるよう促された。

次に spontaneous story telling、リスナーがスピーカーの発話中に次々思いつくままに名詞を発声、スピーカーはその名詞を使用し、ストーリーを継続して行く。例を挙げると、

“about your journey to Oxford” というトピックに基づいて；

(speaker) I was packing my suitcase at home in Hong Kong.

(listener) ‘sushi’

(speaker) Suddenly, my wife said “I’m hungry. I want to eat sushi tonight”.

(listener) ‘seaweed’

(speaker) My wife likes sea weed. She believes it is good for health.

(listener) ‘passport’

(speaker) While I was eating sushi, I realized I almost forgot to take out my passport from drawer.

Underhill によると、このアクティビティにおいては power of imagination が必要で、非常に constructing なプラクティスであるとのこと。実際、瞬時に反応し、途切れる事無くストーリーを継続するには頭の柔軟性と即断力が必要であり、また、語彙力も必須となってくる。クラスの導入部には有効と考えられる。

## (2) Turning Passive Students into Active Learners by Ken Wilson

このレクチャータイトルには非常に期待感があった。理由としては、日々接している大学生は、殆どの場合“Active”とは見受けられないからだ。評価基準に participation の項目を設けても、実際に授業中の発言を含む積極的な態度を加味し、点数にするのは難しい。Wilson も、「ほとんどの学習は passive である。特にほとんどの場合、学生は教員の話しを聞いているかリーディングに時間を使っている。」と述べている。Wilson によれば教員が、知識は即ちパワーであると思う事は危険な発想であり、一方で学習過程において学習者が active に参加する事によって学習効果は増大し、更に “laughter is a great aide memoire.” の言葉通り、「笑い」の要素を加えると一層有効な結果となって学習が定着する、と述べる。以下は一例である。

### Sporting Excellence Simulation (Ken Wilson)

- 1 You chose your name, nationality and sporting ability
- 2 You chose the location and duration of the Sporting Excellence conference
- 3 You introduced yourselves to each other
- 4 You arranged to meet later
- 5 Someone was 30 minutes late and apologised profusely
- 6 You said goodbye to each other at the airport
- 7 You decided on the location of next year's conference
- 8 You wrote to the government
- 9 You met the following year

## 4. ワークショップ

会期中、セミナー参加者は、各回 90 分 × 5 回の計 4 つのワークショップに参加した。以下に紹介する。

### (1) Successful Pronunciation Learning and Teaching

Tutor: Adrian Underhill

Session 1

- Introducing the chart as cognitive map of the pronunciation territory
- Teaching and learning the physicality of the sounds of English
- New pronunciation teaching approaches and techniques for use with learners

Session 2

- Connecting sounds into words and mastering word stress
- Linking pronunciation with saying, hearing, spelling and remembering
- Techniques for exploiting the chart as the ‘pronunciation whiteboard’

### Session 3

- Teaching and learning vocabulary using pronunciation as the memory hook
- Core chart activities for teaching words
- New 'learning centred' approaches to correction

### Session 4

- From words to connected speech
- Core chart activities for developing fluency in connected speech
- Rhythm, intonation and connected speech

### Session 5

- Integrating this approach with your own course materials and personal teaching style
- Tips and tricks for using the chart

Underhill によると、従来の発音指導は聞いて繰り返す、のパターンが多い。それは間違っているではないが充分では無い。発音のチャートを駆使しながら、その発音記号が書かれている場所を確認し、周りの記号との位置関係から発音を認識する。また、発音の学習はダンスのような身体的訓練であり、喉と口内の唇と舌の動きを習得する事によって徐々に第一言語の影響からの解放を試みるべき、と述べる。

また、発音の学習は英語学習では取り残されてきた Cinderella のようだという。忘れられていたけれども実は非常に重要であるとのこと。リーディングの際の inner voice も頭の中での発音が違っていたらそれは speaking に影響する。また、学習者が正確な発音を習得していないと、それが自分で正しい音声と認識してしまう事から、listening にも悪影響を及ぼす。発音記号チャートを教室内で教員が指し、また、逆に学習者が聞いて指し示す繰り返しが行われた。繰り返しの指導中、学習者の誤答を否定するのではなく、都度根気良く “try again” と促す態度は印象的であった。

## (2) Language awareness 1 – Teaching Grammar

Tutor: Jon Hird

### Session 1

What is grammar?

Why do we need grammar?

What is grammaring?

Grammaring activities in the classroom

### Session 2

Words have grammar:

How we can teach grammar by starting with a single word and exploring the grammar patterns associated with it

Session 3

Taking advantage of your students:

How to make grammar practice exercises more engaging, meaningful and effective

Session 4

Grammar in the real world:

Exploring the 'real' use of certain grammar forms and words compared with how they are traditionally presented in many ELT materials

Session 5

Grammar, planning and speaking:

Assessing grammatical accuracy and a look at compelling evidence that pre-task planning improves grammatical accuracy

日々学生が「文法は難しい」とため息をついている。しかしながら学期末の学生アンケートによると「もっと文法を学習したい。」という要望が見られる。これを踏まえ、文法に焦点を当てたワークショップに参加した。一週目は単語、節、文のレベルに注目し、何故文法が必要かを考えながら学習者への指導方法を話し合った。

また Hird は単語使用の実状について corpus を都度参照することにより、その文法上通常行われている説明との差異を説得性あるものにした。例えば 'any' は否定型に用いる、と一般的に指導している例が多いが、corpus によると約 10% しか否定文には用いられず、肯定文か疑問文において「どれでも、何でも」という意味で用いられている。これは corpus で検索してみると検証することができる。また、単語の使用誤例として、英国の大手スーパー、TESCO の事例を用いた。express lane（買い物物の個数が少ない客が優先して会計できるレーン）の上に、TESCO は“10 items or less”というサインを掲げていたが、less は不加算名詞にしか用いないので明らかに誤用である。しかし 10 items or fewer では語呂合わせが悪いということで、このような文法上誤ったサインを掲げていたようだ。その後消費者からのクレームを受け up to 10 items と変更した、という経緯があったらしい。

他にも様々な事例、例えば主語になった名詞を複数か、或は単数として扱うか、等も題材とされた。例えば、my family、the Beatles、など明らかに複数の人数が含まれる主語の場合の扱いについての事例にも触れた。また、最近の whom の使用について、will を使用する場合の根本的考え方について、など corpus に基づいた事例を参照しながらのワークショップが続いた。

特に参加者の中にイタリア、フローレンス大学の言語学者が含まれていたこともあり、文法に敏感な教員同士において実例と各国の文法指導実例の意見交換が続いた。

### (3) Language Awareness 2 – Working with Texts

tutor: Jon Hird

#### Session 1

##### Choosing and using texts

How we can exploit texts and use them as a springboard for language work

#### Session 2

##### Authentic versus adapted texts

The process adapting text for use in the classroom. Comparison of a raw text with its EFL-adapted version

#### Session 3

##### Coherence and cohesion 1

The five major types of cohesive device and ideas for teaching them

#### Session 4

##### Coherence and cohesion 2

The six major elements of lexical cohesion and ideas for teaching them

#### Session 5

##### Genre and 'text type'

An overview of some different genres and other text types pertinent to learners

Hird の Language Awareness ワークショップ 2 週目はテキストにおける言語に焦点を当てた。テキスト中の英語、そしてそれを軸に発展させたアクティビティへの展開、また、ELT (English Language Teaching) 向けに作製されたテキストと、ELT 向けではなく既存のマテリアルを ELT に使用する場合、それぞれのメリットとデメリットについて、その底辺にある TAVI, TALO, TASP (Johns, Davis) について考察を行った。

テキストには 3 つの取り扱い方の違いがあり、それぞれにおいて目的が異なっている。

TALO: Text as a linguistic object

文法と語彙の学習に使用するテキスト

TAVI: Text as a vehicle for information

読解の学習に使用するテキスト

TASP: Text as a springboard for production or Text as a Stimulus for production

更なる展開を目指すための学習に使用するテキスト

例えば、TALO では文法や語彙の学習、TAVI はリーディングを行い理解を得る学習、TASP はスピーキングやライティングに発展させるための学習、とそれぞれに学習目的が異なる。

次に coherence と cohesion の項目については、ライティングとスピーキングの授業を考える良い機会となった。意味の繋がり (coherence) を得るための cohesive devices を使用できない事には、能動的なコミュニケーションにはならない。特に conjunction の役割、additive, adversative, causal, temporal を認識し、学習者レベルに応じてのイントロダクションを行う事が不可欠であるとの再認識に繋がった。

#### (4) Promoting Speaking Skills

Tutor: Edmund Dudley

##### Session 1

Stuck for words: why is speaking hard?

- approaching the topic from a learner's perspective
- considering a variety of factors that make speaking difficult
- suggesting strategies that help students become better speakers

##### Session 2

Support and structure: speaking at elementary level

- structuring and modelling speaking tasks
- providing speakers with frameworks and support
- making simple tasks meaningful and motivating

##### Session 3

Speaking in context: a task-based approach

- establishing authentic contexts for classroom speech
- considering both the process and product of successful classroom speaking tasks
- using speaking tasks to promote autonomy

##### Session 4

Focus on fluency: debates, drama and improvisation

- handling drama and improvisation activities effectively
- setting up and moderating classroom debates
- promoting self-expression and creativity

##### Session 5

### Evaluating students' speech

- providing informal classroom feedback on students' spoken work
- identifying relevant assessment criteria for evaluating students' speech
- exploring a variety of evaluation techniques

ワークショップの第一の目的として、ELT 学習者の不得意箇所を見つけ、克服する対策を実行し、スピーキングの力を伸ばす、とある。まずワークショップでは各自が直面するスピーキングの問題点を話し合った。日本の大学英語教育の現場においては「間違ったら恥ずかしいので話すのをためらう」といった学生達の傾向が強いため、「間違っても良いので話すようにしむけている」と説明したところ、コロンビアの大学では「学生が間違えると大声で笑うので学生の喧噪で授業が成立しなくなる」という発言があった。これは極端な文化差異の例としても、発話する環境を見極める事、パートナーを決めて2人で話す、グループで話す、などの配慮がクラスマネジメントに重要な事であるという点で合意した。

またこのワークショップでは Dudley によるスピーキング・アクティビティの紹介、特に TBL (Task-based learning) (Willis and Willis) についての紹介と考察が行われた。Willis and Willis の述べる TBL においてはコミュニケーションの `task` が中心となり、以下の6つの評価を満たしているかが問われる。

Will the activity engage learners' interest?

Is there a primary focus on meaning?

Is there a goal or an outcome?

Is success judged in terms of outcome?

Is completion a priority?

Does the activity relate to real world activities?

以上を考慮しながら実際に Dudley の提示するアクティビティを実践しながらのディスカッションが繰り返され、参加者間で討議した。特に学習者の年齢や文化背景は異なっても、6項目目の real world かどうか、については学習者の発話を促進するという観点から role play との比較となり、討議が白熱した。

このワークショップの最後では学習者へのフィードバックについて話し合った。前出の朝のレクチャー講演者、Wilson によると、スピーキングにおいては“Positive feedback is tremendously important.”とのこと。また、Hedge は、学習者へのフィードバックは、常に誤用への否定的な部分と、発話への試みへの肯定的な両面を備える事が必要、と述べる。しかしながら、

positive 過ぎるコメントは学習者の誤認に繋がる危険性がある点についても話し合われた。

## 5. 終わりに

当初挙げた参加目的について振り返る。まず、「(1) 授業へ実践応用するための最新知識、スキルの獲得」について、これは4つのワークショップそれぞれから意義ある成果を得た。発音については、疎かになりがちな発音教育への再認識から発音記号チャートを用いた学習者へのアプローチの実践演習を重ねた。言語としての英語については、単語、節、文のレベルからテキストまで文法との関わりから実社会における使用例を習得した。スピーキングにおいてはTBLに基づいたtaskの考え方を基にしたアプローチについての認識と意見交換が進んだ。各ワークショップにおいて最新の例が紹介されると共に参加者同士で考察できた。

次に「(2) 多国籍教員との交流を通じた意見交換、国際理解の促進」についても、参加者の国籍多様性の恩恵を受け予想以上の成果となった。2週間に亘り朝から時には夜までのワークショップとレクチャーを通し、実際に会って話しあっただけでなく、帰国後もインターネットのSNS (social network site) のfacebook上にセミナー参加者と講師によるコミュニティが立ち上げられ、今尚活発な交流が続いている。これは正にデジタル時代の恩恵で、その後も英語教育から各国の情勢、プライベートな話題、と多岐にわたり交流が続いている。

また、最後に、英語教育そのもの以外にも文化的講演、ツアー等により、英国、特にオックスフォード大学とその街について触れる機会が潤沢にあった。夜8時からの講演ではオックスフォード大学についての歴史と現状、英文学についてはJane Austin研究者である英文学教授による講演、また、オックスフォード植物園訪問、他カレッジやパブツアーなどホスピタリティ溢れるセミナーとなった点も加筆して、本レポートを締めくくりたい。

## 参考文献

Dudley, Edmund. Handouts of the English Language Teachers Summer

Seminar, July 31 – August 13. Oxford, UK, 2011.

“English Language Teachers Summer Seminar.” University of Oxford.. 2011 6 September 2011 <[http://www.conted.ox.ac.uk/courses/details.php?id=X162-2&search=Enter%20search%20terms&submitbutton=Search&multisearch=single&search\\_type\[\]=900](http://www.conted.ox.ac.uk/courses/details.php?id=X162-2&search=Enter%20search%20terms&submitbutton=Search&multisearch=single&search_type[]=900)

Hedge, Tricia. Teaching and Learning in the Language Classroom, Oxford University Press, 2000.

Hird, Jon. Handouts of the English Language Teachers Summer Seminar, July 31 – August 13. Oxford, UK, 2011.

John, Tim. and Florence Davies. Text as a vehicle for information: the classroom use of written texts in teaching

reading in a foreign language, *Reading in a Foreign Language*, 1 (1), pp. 1-19. 1983.

Underhill, Adrian., *Handouts of the English Language Teachers Summer Seminar, July 31 – August 13*. Oxford, UK, 2011.

Wills, Dave, and Jane Wills. *Doing Task-based Teaching* Oxford University Press, 2007.

(2011.9.24 受稿, 2011.10.3 受理)